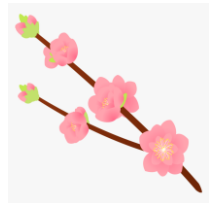


春待つ心

「冬来たりなば春遠からじ」。冬の次には必ず春が巡って来る。自然の運航には寸分の狂いもない。冬、極まって春を呼ぶ。これは天命である。逆境に落ちた時、そこから抜け出ようと焦る。しかし、これは先決ではない。どんな場合も、自らの心を倒してはならない。運命はふさがっても、心までふさいではない。どこまでも、春待つ心を失わない。これは運命打開の第一歩である。

～ 文筆家・政治家 常岡 一郎 先生 の 言葉より ～

桜の蕾も膨らみ始め、早春の足音が遠くから聞こえる季節になりました。校庭に注ぐ日差しにも春のぬくもりが少しずつ感じられ、体育館近くにある白梅の木が白い花を咲かせています。児童達は、学年末の最中、今、学習面と生活面のまとめに一生懸命励んでいます。梅の花が凛と咲き、心地よい香りを周囲に漂わせてくれるように、児童も私たち大人も、4 月の新年度、良いスタートを切ることができるように、「今、ここ」を、真摯に、忍耐強く、過ごしていきたいものです。



全校朝会の話 紹介

2 月 7 日（火）の全校朝会で、4 年の国語の物語教材「ごんぎつね」を引用して、前回の校長講話に引き続き、今の学級での生活も残り一か月半となった児童達に、友達（周りの大人を含む）関係についての話をしました。ごんぎつねの「ごん」と人間の「兵十」の心の交流を扱ったこの作品を知っておられる方は沢山いると思います。今回、児童に伝えたメッセージは以下のような事です。① 相手の気持ちは孤独だからこそ、また似たもの同士だからこそ分かることがある ② 希望をもって逞しく過ごすためには自他を責めるエネルギーは使わない ③ 友達の立場に自分を置くことで恨みや葛藤を乗り越えることができることもある ④ 大切な人に愛と感謝の思いを伝え合おう ⑤ 今、ここを一生懸命に生きよう ⑥ 小さなことであっても相手が自分にしてくれたことを思い出し、感謝する習慣を意識して身に付ける。そうすると知らないうちに優しくなり、心が清められていくなどです。

「ごんぎつね」のお話は完全な善人であることのできない人間がその弱さや誤解、葛藤などを乗り越えて相手を思いやる力を発揮していく素晴らしさを描いた作品です。身近な人達に対して自分にできる小さい努力を積み重ねることは、その人の人間らしさを増し、豊かな人生へと導いてくれると思います。話したことが、児童達の心に小さくても良いので結晶となり残っていることを願います。

あたりまえ

千葉県在住 中2生徒 作

水面には いつも

少し崩れた 世界がある

鏡にも いつも

自分とはちがう 自分がいる

いつも お手本のようにいなくて

いつも どこかで間違えて

でも それが当たり前

◆「感想」お手本はあくまでお手本。縛られない方が良いですね。窮屈さと緊張を

時に開放し、自分の好きなことに没頭する時間を

作ることも、あたりまえ

の様に大切ですね。

の様に大切ですね。

の様に大切ですね。

